

2017年遭難対策訓練

2017年1月14日(土)～15日(日)

参加メンバー：SKT (CL) HND (SL) ABE (SL)
KKD MTU UZU DTE TYK
INO 合計9名

気象庁によると、14日ごろから、強い寒気が日本列島を覆うように南下して冬型の気圧配置が強まり、広範囲で厳しい冷え込みになる見通し。西日本や東日本の太平洋側でも雪が降り、積雪する恐れがある。という記事が13日の朝刊に載っていた。

遭難対策訓練は山岳会全体としてのもので、76期育成プログラムではないため、育成プログラムに関わっていない山岳会の人達と一緒に山に行く貴重な機会であること、またラッセル練習や雪洞でのビバーク練習をするということも聞いており、以前からとても楽しみにしていただけに、はたして天気はどうかかと思っていたが上記のような残念な情報。中止の可能性もあるかなと考えていたが、リーダーから決行との連絡をもらい、悪天候が予想される中での訓練に対するドキドキ、そして雪洞初体験に対するワクワクなどが混ざった状態で遭難対策訓練に向かった。

13日の晩、大阪を出発して勝原駅まで行き、そこで仮眠をする予定であったが、積雪のため勝原駅手前で車が前進出来ない状況になった。皆で車の周囲を除雪し、何とかUターンし引き返した。その日は道の駅にて仮眠。

14日の朝、除雪車が入っているだろうとの予測で、とりあえず再度チャレンジということで再び勝原駅まで向かった。予想通り除雪車がまさに入っている最中であり、勝原駅まで行くことは出来た。しかし、今後も降雪は続く予報であり、当初予定していた荒島岳で訓練をするとなると、スキー場跡の駐車場に駐車させた車が、下山時には雪に埋まってしまい閉じ込められて帰れなくなる可能性が考えられた。

そこでリーダー陣が話し合い、営業しているスキー場の駐車場ならば除雪がしっかりとされるため、車が閉じ込められる心配もないと判断し、近くの九頭竜スキー場へ行くことになった。

九頭竜スキー場駐車場からワカンを装着し、我々総勢9名は音楽が流れるゲレンデを外れ、ゲレンデ裏手の樹林帯の中に入って行った。始め積雪は膝下くらいであったが、どんどん奥に入っていくにつれ膝上、そして腰までとなり、一列になりラッセル。先頭が疲れたら2番手に代わり、先頭だった人間は最後尾に付く。ラッセル時の歩行は「足を横から大きく回して前に持ってくる」など先輩からアドバイスをもらいながらどんどん奥に入っていく。



駐車場から1時間くらい歩いただろうか、山の中腹あたりの適地にテントを2張り設営した。少しの休憩ののち訓練開始。



まずはビーコンを使っての搜索訓練。リーダーがビーコンを山の中に隠し、その隠されたビーコンを探すというもの。始めは76期の新人2人だけで搜索をする。先輩からアドバイスをもらいながら、ビーコンからの電波がどういう流れで発信されているか、埋没者の近くまできたときに使う十字法のやり方など、搜索を行いながらその時々助言をもらいとても実践的なものになった。その他、埋没者が複数の場合を想定して、ビーコンを2か所に隠してグループで搜索をするなどバラエティーにとんだ搜索訓練であった。



次の訓練は、ビーコンで埋没者のおおよその位置が分かったあとの行動。埋没者の埋まっている位置を特定するためにプローブ（ゾンデ棒）を使っての搜索訓練。雪面に穴を掘り、埋没者役がその中に入り、救助者役がプローブを雪面に刺して埋没者の位置や深さを特定する。埋没者役の安全のために、頭が入る部分は横穴を掘り空間を確保してくれており、直接雪をかぶらないようにツェルトをかぶり、携帯電話でたえずコミュニケーションが取れるように工夫もしていた。埋没者役、救助者役の両方を体験し、雪の重みやプローブが人体に当たった時の感触などを体験した。



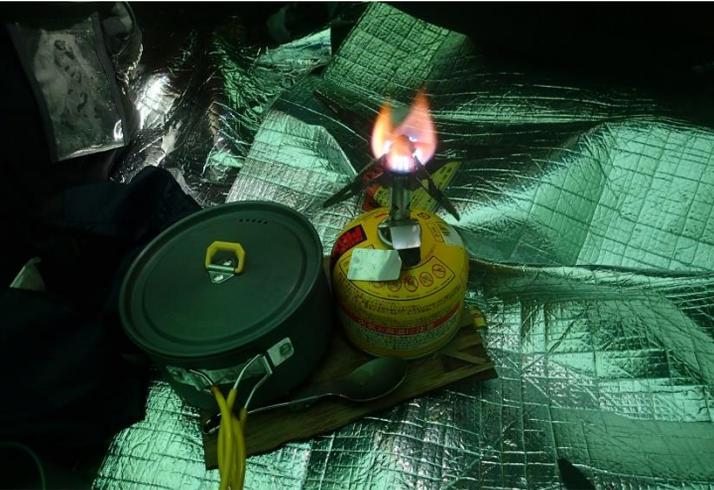
そして、雪崩の仕組みや弱層テストについての説明のあとに、いよいよ雪洞作りに入った。

3人グループ×3組に分かれ、各グループが自由に雪洞づくりに取り掛かる。私が入ったグループは当初、リーダーの案で、山の傾斜部分に横穴を掘り、その後入口を雪のブロックなどで狭めていくというイメージで雪洞を作る予定であった。しかし横穴を掘り進めていくと案外すぐに斜面の土が露出してしまい、あえなく断念。完全な雪洞を作れるほどの積雪はないようであった。そこで、少し場所を変えて斜面を掘り、そこに人間3人が足を延ばして座ることが出来るような状態に雪を削って行った。そして、上からツェルトを屋根のように被せてツェルトの四隅を固定させることで半分雪洞のような感じのものを作った。足を延ばして楽な姿勢で過ごせそうである。他の2グループの出来具合を見に行っていたが、他のグループも我々と同じようなものになっていた。



今夜のビバーク訓練のための寝床も出来上がり、後は夕食まで各テントで水づくりである。雪袋になるべく汚れていない雪を詰め込んで、テント内でせっせと水づくり。単純作業を行いながら先輩方と話をした。育成プログラムに関わっていない先輩とはこれまでほとんど話す機会はなかったため、今回話ができた事で、また少し泉州山岳会の輪の中に入ることが出来たような気がした。

水づくりが終わった時点で、日が沈むまでにはまだ数時間あった。午前中のラッセル訓練で納得いくラッセルが出来なかった私は、リーダーの許可を得て、先輩2人と共にリベンジラッセル訓練に出た。先輩2人が後ろに付いてくれ、後ろからアドバイスをもらいながらのラッセルである。午前中はがむしゃらに飛ばしてしまい、すぐに息が上がってしまったので、今度はペース配分を考えながらじっくり進んだ。傾斜の強い場所もあり、自分の目線くらいの雪に対しては手で雪を掻き落とし、膝で足元の雪を固め、そこに足を乗せる。呼吸を整え、雪を掻き、足で固め、足を運ぶ。じわーっと汗がにじんでくる。シーンと静まり返った雪山に「はぁはぁ」と自分の息づかいだけが聞こえてくる。どれくらいの時間登っただろうか、先輩から「そろそろ時間」と声をかけられ、はっと我に返る。無心で登っていた。そろそろ下山しないと日が暮れてしまう。下山は何とあっけないものか、自分たちが登ってきたトレースのついた道を進むのは何と楽なことか。あっという間にテント場に到着。夕食を済ませて、いよいよビバーク訓練である。



寒いので、手袋(テムレス)を足にはいたり、スタッフバックで即席のテントシューズを作るなど、色々なアイデアを共有した。いざというときに、パニックにならないように、落ち着いた気持ちの時に色々情報共有をできるのは、遭難訓練の醍醐味である。

訓練といっても、ただ先ほどつくった半雪洞に入ってじっと時を過ごすのみ。直接雪の上に座らないために銀マットを敷き、シュラフカバーを被る。そして出来るならば一晩そこで過ごしてみようというもの。最初はおしゃべりをして過ごしていたが、いつの間にはウトウトとなり寝ていた。疲れがあるので寝ることは出来るのだが、やはりお尻や背中、足先などが冷えてくる。寒さで起きてしまうのだ。浅い眠りと覚醒とを繰り返しつつ、2時間、3時間と過ぎていった午後10時ごろ、誰かからともなく「どうする？」との声。結局ビバーク訓練は3時間が経過したところで終了となり、テントにもどり暖かい寝袋に包まれた。この時改めて寝袋の有難さを噛みしめた。そして他のグループはというと、ひとつのグループは我々のグループとほぼ同じくらいの時間でテントに戻っていたが、残りのもうひとつのグループは翌日の朝までビバークを続けた。そのメンバーに翌朝尋ねると、「ただ寝てただけですよ」との返答。いやいやたくましい限りである。

15日最終日、この日は負傷者の搬送訓練である。まずメンバーのひとりが基本的な搬送の説明をしたあとで、メンバーみんなでツェルト2つとマット、カラビナ、シュリングなどを使用して負傷者の保温を維持しつつ、どうやって包み搬送するかを話し合いながら進めていく。一度仮で数メートル搬送してみて、その後はもうそのまま負傷者を皆で力を合わせて本当に下山させる。昨晚降り続き一段と深くなった雪面をラッセルしつつ、ロープで負傷者を確保して急な斜面を降りてゆく。





搬送時に大事なのは、負傷者の保温があげられる。実際中に入って搬送されていると、最初はよいのだが、10分ぐらいから冷えてくる。足のつま先は感覚がなくなるほどの寒さだった。今回は訓練だったので、比較的保温は最小限にしたが、実際の際には、ダウンやシュラフカバーなどできちんと負傷者を保温することが大事だと感じた。



昼前にはスキー場ゲレンデのところまで到着し、今回の遭難対策訓練全行程が終了となった。その後はいつも通り、日帰り温泉に入り、その後食事して帰阪となった。

今回初めて冬の遭難対策訓練に参加させてもらい、いろいろな初体験が出来た。これは今後雪山登山を続けていくうえで当然身につけておきたいことであり、技術や知識を忘れないためにも毎年継続して参加したいと考えます。本当に良い経験をありがとうございました。

記録：TYK